

## ソフトボール評論家 K. W. 生氏

水 野 精一郎

私の手元に昭和30年7月6日発行の“ソフトボール通信”第五号のコピーがある。その真ん中に、言うなれば社説の位置に、評論家 K. W. 生氏の筆になる部対抗リーグ戦の総評が載っている：“……さわれ、かのぞうきんのごときボールを汗を流してひっぱたく所に、CMO ソフトボールの醍醐味があるので、勝敗は別として、今後健全愉快なリクリエーションとしてかかるスポーツが益々発展せんことを祈り、併せて関係者の努力に感謝して筆を擱く。”K. W. 生氏とは言うまでもなく当時の中央气象台長和達清夫先生である。昭和30年といえば、中央气象台はまだ焼け残りの庁舎に住まっていた頃であるが、皮肉にも爆撃のおかげで瓦礫に溢れた空き地だけは一杯あった。これに目をつけたのが野球好きの人達で、いつのまにかそこで、昼休みにソフトボールをするようになった。やがで各課対抗、部対抗戦などが催されるようになると熱戦の首尾を伝えるスポーツメディア“ソフトボール通信”が自然発生的に創刊され、CMO におけるソフト熱は大いに高まった。どうした訳か編集所は私の所属していた企画課に移ってきた。

ソフト通信の最大の目玉は先生の滋味掬すべき評論、観戦記であった。タイに出張された時には、キックボクシングの観戦記までも寄稿されたが、観察は正確、描写はいきいきとして今読んでも楽しい。しかしソフト通信発行を怠っていると、評論一編を持って来られて催促されるので、次号の印刷を急がねばならなかった。先生は評論ばかりではなく、プレーをすることが何よりもお好きだった。総務課の不動の一塁手で、そこ退け、と言う人はいなかったから、このポストだけは無競争であった。それでも、監督が勝敗に拘ると外されることがあり、そうすると、評論が辛辣になるようで、ご本人も笑ってそれを認めておられた。

私が WMO 事務局に着任したのは1962年の末で、その翌年の3月には先生は退職され、WMO の執行委員も辞められた。執行委員は、言ってみれば国会の先生

がたのようなもので、中には事務局を目の敵のようにして苛めたがるのがいた。おおむね大口抛出国の台長であったが、先生はスタッフに優しい、ということで大変評判がよかった。その頃、WMO の業務に海洋、津波などを加えて“地球物理機関”にしてはどうか、という話があり、先生の提案ではないかと思う人もいたが、先生は否定しておられた。それはやがて立ち消えになったが、30年経って最近また同じ話が燦り出したようだ。

先生に最後にお目にかかったのは11年前になる。季刊の WMO ブルティンの巻頭記事は著名な気象関係者とのインタビューで好評であるが、先生のも載ることになり、エディターの Taba 氏が東京で先生の談話を取ってきた。インタビューの原稿が出来上がり、Taba 氏に意見を求められたのだが、先生のキャリアや業績が十分に反映されていないように思えた。そこで、たまたま東京出張があり、私が追加インタビューすることになった。新宿内藤町のお宅にお邪魔したのだが、インタビューなどと言うものではなく、お昼をご馳走になり、例によって漫談調の面白いお話しを伺いながら、二人で追加分を書き上げた。このインタビューは1985年1月号のブルティンに掲載されたが、載った写真の一枚はソフトボール試合のバッターボックスに立つ先生の勇姿である。きっとお気に入りの写真だったのであろう。事務局から別刷りを送ったところ、私にも丁重な礼状をくださった。1985年2月10日付けのこのお便りで、先生はソフトボール時代を懐かしまれ、“…あれから何年になりますか、歳月はいつか過ぎ、私も80を2つも越えました。”と述べておられる。それから更に10年の歳月が流れ、気になりながらも私はご無沙汰申し上げていて、訃報を受け取ることになった。

先生、ヒットの夢を見ながら安らかに眠りください。